

米国地質調査所(USGS)の最新地質図標準動向

元地質情報調査部 地質情報管理室 原口 征子

平成14年3月3日から10日に、米国地質調査所(USGS:レストン本所、デンバー支所、メンロパーク支所)を訪問して、地質図作成に携わる様々な研究者、専門職、企画管理職の方々のお話を伺った。詳細は、地質調査総合センターの出版物、WEBサイトに掲載する予定であるが、ここでは、レストン本所の地質図専門職とその環境を紹介する。

広大な国土を有するアメリカの地質図整備、製作方法、標準化がどの程度進んでいるのか、大変興味がある。特に、地質図CAD作成と電子製版に対応した標準は重要である。USGSの作業室は、地質図作業のためのパソコン、マッピングケース、昔風の製図用大机、最新の出力機器等に囲まれている。働くスタッフは、意外にも5人だった。かつて製図に使用された古いスクライバ

が大事そうに傍らに置かれており、歴史を大切にしている米国ならではの光景である。作業されていた地質図のデジタル化とCAD技術による作成、印刷のためのイラストレーターによるレイアウト、出力図による校正、さらに1図面の完成に要する時間等、図の作成過程は日本の我々の方法と実はあまり変わりなかった。日本と大きく異なった点は、地層等の色の設定を地質図専門職が実施している事である。又、米国における地質図専門職の長年の経験と熱意、その重要性は、日米機関の違いによるとはいえ、評価の高さがうかがえた。地質図の色・地

紋・記号等の標準化と地質図作業の詳細に関する意見交換、および、電子製版・出版等の新しい情報が得られたこと、米国政府による最新の地質図標準案を入手できたことは大変有益だった。

この度の訪問では、世界的に見ても標準を維持管理する業務の大切さと、国の役割としての不可欠性を改めて確信した。地質図CADの方法は未だ発展途上にあり、日本の今後にも示唆に富むと思われる。



世界地質図委員会(CGMW)会議に参加

— 地質調査分野における国際協力の一例 —

地球科学情報研究部門 加藤 碩一

平成14年1月31日から2月1日まで4年に一度開催される世界地質図委員会(Commission for the Geological Map of the World、略してCGMW)が国連機関ユネスコのパリ本部会議室で開催され、今年は25カ国、約60人の地球科学専門家が参加した。CGMWは、非営利の国際組織で、世界の大陸・海洋における小縮尺の地球科学マップ作成を支援、調整して最終的に出版することを目標としている。1881年の第2回万国地質会議(IGC:International Geological Congress)がイタリアで開催され、当時最も先進的であったヨーロッパの

小縮尺地質図編纂のために組織された地質研究者グループが中核となって発足したもので、1911年から本格的な国際組織として活動し始めた(日本の地質調査所が設立されたのは1882年)。CGMWは、現在では1961年に設立された国際地質科学連合(IUGS:International Union of Geological Sciences)の附属組織となっている。正規のメンバーは各国の地質図を出版する地質研究機関(地質調査所等)が主であるが、最近では世界中の専門家からの科学的インプットを積極的に求め、海洋関連研究所、民間企業などとの協力を活発

に行っている。

CGMWは、議長、事務局長、そして大陸単位および各主題(Thematic Subcommission)の委員会責任者で構成されている。すなわち、地域別には、アフリカ、北・中米、南米、南極、南・東アジア、オーストラリア・オセアニア、ヨーロッパ、中近東及び北ユーラシアの10委員会、主題別にはテクトニックマップ、メタロジニックマップ、メタモルフィックマップ、ハザードマップ、海底地質マップおよび水文地質マップの6委員会である。日本からは、ハザードマップ(Hazard Mapping)の責任